

備前・播磨地域の渡来人「秦氏」と神社について

日本先史古代研究会 会員 井上秀男

一、兵庫加東郡来住城と浦伊部の来住家の私考

仮称“きび”考の第2号に備前市浦伊部の来住法悦(きしゅ・ほうえつ)に関する文面を投稿しました。その中で来住氏については岡山県立博物館・研究報告②の中から来住法悦関係文書を参考文献として書きました。来住家の先祖については、由緒書によると、同家の祖は讃岐国高松の牢人で善悦の子＝法悦のとき浦伊部に移住し、従来の長尾姓を改めて、来住氏を称したと記されている。又「**来住権右衛門 口上 覚**」の文面に**法悦(来住)より私迄七代ニ成申候 己上、右法悦儀 讃州牢人ニ而御座候 由 名字来住ト伝申候 己上**と来住権右衛門平忠景の口上覚が来住家文書に見える、それと来住家蔵「系図」による略系でしか祖先を調べる資料は、今のところ見当たらなかった。もう一つの文献として播磨後風土記第七卷、古城の部の条に、来住城があり播磨国加古郡(今は加東郡)来住郷来住村に来住城が載っている。「**城主多田満仲之末裔来住比処依之名来住安芸守景政子源三郎景利皆武勇也天正年中楯籠(たてこもり)三木城郭戦死今有子孫里諺景利三男備前忌部住秀吉出張于時供而行病有之止又右景利三人一秀長為仕官一石州浜田行以武幹頓才為仕官一忌部太閤丸屋敷止宿為鋤業**」と記されている。

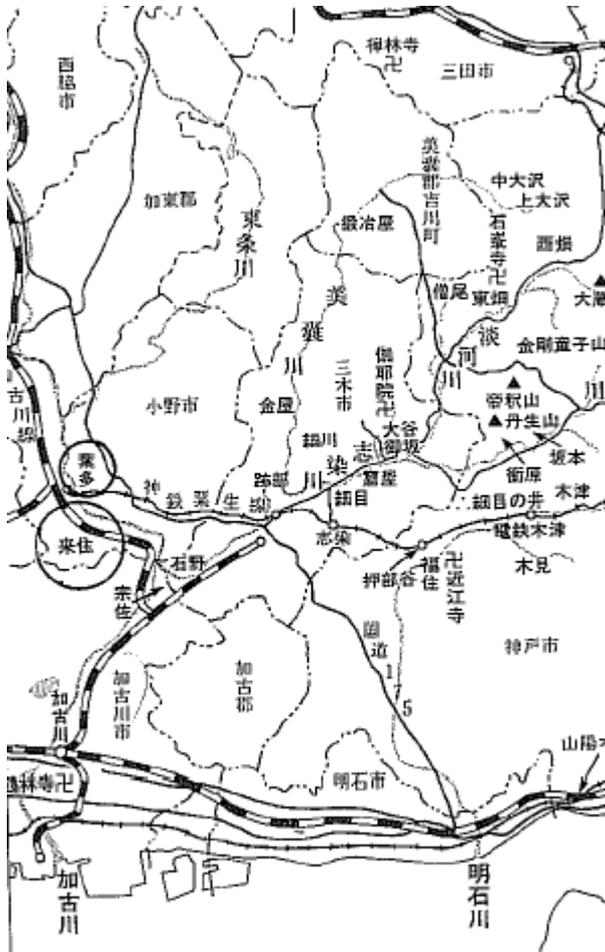
赤松氏とその研究(一)藤本哲著、168頁に同文の文面で来住城について書いてある。しかしこの来住城主、来住安芸守景政は多田満仲の末裔となっている。備前市浦伊部の来住家の菩提寺の妙圀寺は永長年間(1096～1099)多田満仲5代孫、多田明国の創建と伝えられている。どちらも多田満仲に文献上で関係があるようにおもわれるのですが詳しく調査してみるべきであろう。来住城の文面の中に備前忌部住とか忌部太閤丸屋敷、という箇所から見ると浦伊部の来住家と関係が深いように考えるのですが、これも良く調査してみる必要があると思う。

それともう一点疑問に思うのは、来住家系図を見ていて来住宗重郎平輝景(法悦)その子供来住弥三兵衛平豊景と代々名乗の前に平の字が入っているのに気付く、これは系図の角度から見た場合に平氏の関係の流れをあらわしている。源氏の流れは源の字を用いている。来住城主の来住氏は多田満仲の末裔となっている平のところは源であれば、摂津多田の源氏の末裔であると理解ができるのである。私考するに来住氏は播磨の赤松氏に關係の平氏の流れを汲むのであろうと思うが定かでない。又来住氏の代々の名前に景の字を通し字として使用している。法悦は輝景、子供は豊景と、来住城の来住安芸守景政、子供が景利と景の字を通し字としている。何か浦伊部の来住家と共通したものを感じるのである。来住城の説明文の中に**天正年中楯籠三木城郭戦死……**の天正年中とあるが、豊臣秀吉が天正6年(1578)に播磨三木城主の別所長治を攻めた三木城合戦の時に別所氏側にいて楯籠って戦死したのであろう。三木城は最終的には、天正8年正月頃に落城する。三木城落城の2年後に備中高松の役があり、天正10年(1582)6月2日に京都本能寺の変があって、秀吉は急いで京都へ馬を走らせ、浦伊部の来住家に立ち寄ることが出来なかった。(前号を参照)

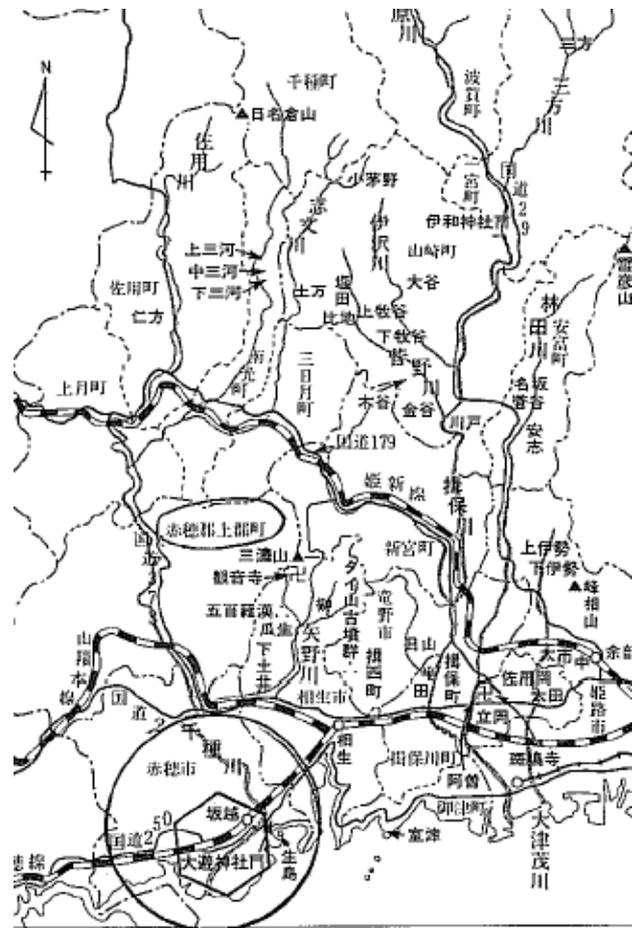
二、兵庫加東郡来住郷来住村の地名と神社 (兵庫加東郡来住界隈の地図参照)

今から15年前に古本屋から入手していた「兵庫の中の古代朝鮮」という本を読んでいたら渡来人ゆかりの神社と地名の条に「来住」=きし という珍しい地名があるとして、地名の由来に関しての文面が目にとまり、その内容は、前項の来住城のある加東郡来住郷来住村の地名についてで、このあたりは古名を伎須美野(きすみの)といていたのであるが、伎須美がなまって「きし」となったようである。「播磨鑑」の加古郡の条に由来が記され来住村にはスサノオノミコトを祭った牛頭天王(ごずてんおう)社があって、この神社は建久年間(1190～1199)に国中に疫病が流行して人民が多くしんでいくので室山の常光寺にいた泰順という僧侶が疫病をとりのぞく為に建久3年(1192)に京都の祇園社(八坂神社)の分霊スサノオノミコトを迎えて祭ってから疫病が鎮まり、この時に牛頭天王のおつげがあって「私が紀氏野(きしの)に祭られるようになってから疫病の心配はないであろう。又・山の下の温泉が出たのも私が来住(来て住む)した証拠である」といわれ、この時から紀氏野を改めて来住村と名付けた、来住には大荒(おおざけ)社があって秦河勝を祭っている。

以上の由来譚によるとこのあたりは紀氏野と呼ばれたところであったが牛頭天王社を祭るようになってから来住と書くようになった。「牛頭天王(スサノオノミコト)は新羅から渡来した神様で渡来人達が祖神として崇拝した神であることを思えば、この来住村に渡来人が定住していたと推測される」と来住(きし)の地名について書いてあった。来住の近くに葉多という地名があり昔は小野町畑と言っていたとのこと。秦氏は新羅からの渡来人で、日本書紀によると、応神天皇の時代(5世紀初頭)弓月君(ゆづきのきみ)が百二十県の人夫を連れて渡来し、淀川(山城川)・桂川(京都)あたり山城国葛野郡に定住し、河川を改修し農業や養蚕を営んでいたというのが秦氏の祖といわれている。



兵庫県加東郡来住界隈



赤穂市坂越界隈の地図参照

三、秦河勝を祭った兵庫の神社 (赤穂市坂越界隈の地図参照)

秦河勝は飛鳥時代に聖徳太子の最高の臣下として、当時の朝廷の財務担当の大蔵大臣として活躍した豪族である。その秦河勝を氏神として祭った神社として大避(おおさけ)神社が兵庫県内に鎮座している。赤穂市坂越(さこし)の「大避大明神」大避神社である。神明帳には「元名大辟」と書く「オオサケ神」を「大荒大明神」と書く。又大酒神社と酒の字をあてる神社があるが酒の神ではない。坂越の大避神社と同じ性格で境の意の「辟」が「酒」になったのであり境界神としての神社名を持つ塞の神、道祖神的な意味をもっていると考えられる。

山城国の大酒神社は山城秦氏の本拠地太秦(うずまさ)にあるが、播磨国の大避神社(赤穂市坂越)のある赤穂郡周辺にも秦氏がいた。延暦12年(793)4月19日付の播磨国坂越・神戸両郷解(げ)には天平勝宝5年(753)頃、この地に秦大炬(おおこ)なる人物がいたとあり「三代実録」の貞観6年(864)8月17日条には播磨国赤穂郡大領外正七位下秦造内廩が外従五位下になったとある。赤穂郡の大領が秦造であったということが「続日本紀」にあり、大領は郡の長官でもとの国造クラスの、その地方でもっとも有力な豪族が郡の大領に任ぜられるのが律令制の慣例である。赤穂郡ではその大領が秦造です。「平安遺文」の史料では11世紀後半の東寺文書の中に赤穂郡の大領秦為辰(はたためとき)が土地の開発領主として開墾していることの史料が残っている。

また、長和4年(1015)11月の国符に記された赤穂郡有年(うね)荘の文書に寄人41人の連名があり、その中

で秦姓を名乗る者が 12 人もいたことが記されている。この様に赤穂郡には秦河勝を氏神として祭った大避神社が建てられ古くから秦氏の勢力が広がっていた地域と思われる。



秦河勝上陸を伝える坂越生島

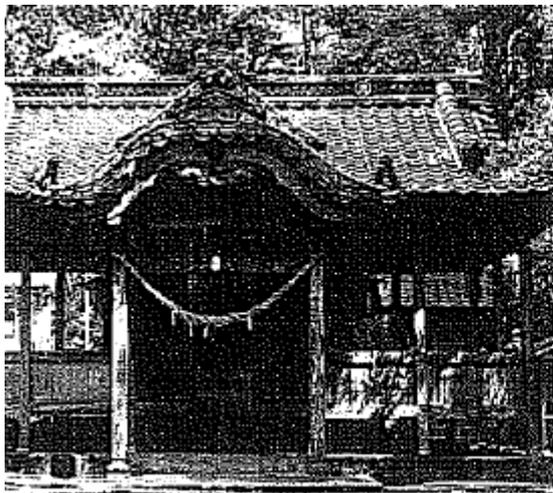


(播磨名所巡覧より)
播州坂越大避大明神の図

四、赤穂郡坂越以外の地で祭られている大避(おおさけ)神社

赤穂郡上郡町大枝新という集落の中に千種川に沿った場所に大酒神社が鎮座している。以前赤松氏の歴史を訪ねるため、赤松地区に足を運んだ。赤松氏の菩提寺の法雲寺の境内にある赤松円心・則祐・満祐等の五輪等を写真に納めたりした。上郡町の中心から国道 373 号線を千種川に沿って北上すると左側に広い沖積地が広がっている平坦な土地の中に森が見える。その場所が大酒神社である。境内には昔から何年も経った巨木が何本も生えていて歴史を感じる神社である。

旧赤松村の岩木に大避神社がある。(写真参照) 旧赤松村の岩木は「慶長播磨絵図」に載る岩木鍛冶屋村を含む旧岩木村である。岩木には良質の銅鉞山の峯尾山があり、この地の大避神社は鍛冶(鍛冶屋村は鍛冶村ともいわれているが、むかしは鍛冶千軒ともいわれていたという) 鋳物・採鉞にかかわる人たちが祀っていたのであろう。



岩木大避神社



竹万大避神社

五、備前香登(かかと)の大酒殿跡と秦氏

秦氏は播磨西部から備前・美作にかけて広く分布している。8 世紀頃、備前国人で香登臣(かかとのおみ)の姓を賜った秦大兄、邑久郡積梨郷に住んでいた秦造国足と秦部国人等の秦氏が見られる。備前香登本の大酒殿址は秦大兄の先祖を祀っていたと伝えられている。大酒というと播磨の秦河勝を祀っている神社に大避神社がある。備前の周辺にも播磨の秦氏系氏族が住んでいたのだろう。美作国には、秦豊永が三保村大字錦織(に

しきおり)の村社の錦織神社に祭られている。久米郡の土地名で秦氏に関係した地名も数多くある。

六、和気清麻呂と秦氏

和気清麻呂は天平勝宝 4 年(752)頃、奈良の東大寺大仏開眼供養が行われた、この頃、都に出て武官として朝廷に仕えた。清麻呂 20 歳頃である。また清麻呂の姉の広虫が采女として奈良の都にいた。天平宝字 6 年(762)6 月に孝謙上皇(女帝)が出家し広虫もこれにしたがって尼となり法均(ほうきん)と号して上皇の腹心となる。そういった身近に中央とのパイプ役としての姉の広虫がいた関係で朝廷内での出世もでき、清麻呂自身の人格もあり都での活躍が出来たであろう。清麻呂は弓削の道鏡事件・長岡へ都を移す長岡遷都・平安遷都など国家の大事業に関与して来た。その国家の寺院・土木・建築などをする人物、職業人として活躍するのが、渡来人の秦氏や他の渡来系の氏族の支援と技術力・経済力を得ていると考えられる。和気清麻呂は当時の渡来人との深いつながりを持っていたと思われる。

寺院の建立・土木河川工事など技術集団と親密な関係を持って中央の朝廷で活躍した和気清麻呂である。故郷の吉備地方の備前・美作の郡司達に寺院の建立等の促進をうながし、和気清麻呂の子供＝和気広世と五男真綱(まつな)は平安山岳仏教の発展の為に力を尽くした。最澄・空海の外護者となり平安仏教の創立に貢献している。和気清麻呂は宝亀元年(770)頃、祭祀官として備前美作の国造(くにのみやつこ)に任命されている。熊山にある熊山遺跡の築造には、和気氏と渡来人の土木技術集団の秦氏の協力があったと思われる。熊山遺跡の解明には、色々な角度から調査研究をして、熊山遺跡の解明がされる時がくる様に願っている。



和気清麻呂像と和気神社

- | | | |
|------|-------------|-------|
| 参考文献 | 兵庫の中の古代朝鮮 | 段熙麟著 |
| | 大日本地名辞典 | 吉田東伍著 |
| | 和気郡史 | |
| | 和気清麻呂 | 平野邦雄著 |
| | 秦氏の研究 | 大和岩雄著 |
| | 赤松氏の史料研究(一) | 藤本 哲著 |
| | ふるさと上郡のあゆみ | |
| | (赤松氏総集編) | 上郡町編 |